

## 新留学プログラム「ソフィア・インターコンチネンタル・プログラム」が開始 学生自ら計画し、2か国以上の国で学びを深める

グローバル教育センターは、2025年度より新たな留学プログラム「ソフィア・インターコンチネンタル・プログラム」を開始する。参加学生は自ら設定した課題に基づき、プロジェクトを立案・実行し、その過程で2回以上、異なる国に渡航する。渡航先や期間も学生自身が決定する、これまでにないユニークな内容となっている。

プログラムの目的は、学生が多様な視点を持ち、サステナブルにグローバル社会に貢献できるリーダーシップを育むことにある。参加者は本プログラムの指導教員である島田久仁彦特任教授のサポートを受けながら、さまざまな仮説を立て、複数の国や文化の中で課題を検討し、具体的な解決策を模索する。

実施期間は2025年春学期から秋学期までで、夏期休暇や春期休暇中も含まれる。1回の渡航につき1か月以上の滞在が必要で、費用は自己負担となるが、1人あたり50～70万円の奨学金が支給される予定。

グローバル化推進担当副学長の森下哲朗教授(法学部国際関係法学科)は、「このプログラムは学生が主体的に課題を設定し、現実の社会に貢献する解



学生へ新しい留学プログラム設立に込めた思いを語る森下副学長

決策を模索する場。異なる国や文化に触れることで、視野を広げ、深い学びを得てほしい。多くの意欲ある学生の参加を期待したい」と語る。

応募条件は、渡航時に学部正規生2年次以上または大学院生であること、英語力CEFR B2レベル以上(TOEFL iBT 72、TOEIC 785相当)を有することなど。書類審査と面接審査を経て参加者が決定される(出願期間はすでに終了)。

2025年度はパイロット版として実施されるため単位付与はないが、学生が主体的に計画を立て、異文化交流を通じて学びを深める貴重な機会となる。将来的には、内容の拡充や改善も検討されており、本学ならではのグローバル教育の新たな挑戦に期待が高まる。

## 日本の伝統工芸とものづくりの魅力を伝える「SOTOBORI展」 経済学部ジョーンズ教授ゼミが企業12社と協力

経済学部経営学科アダム・ジョーンズ教授のゼミ生8人と企業12社が協力し、日本の伝統工芸とものづくりの新たな可能性を探る展示会「SOTOBORI展」を12月10日～21日までの12日間、東京・日本橋横山町のTOIビルにて開催した。

ジョーンズ教授が担当するゼミでは、2019年度からグローバル市場における文化・創造性産業を取り上げる産学連携プロジェクト「SOTOBORI PROJECT」を実施。ものづくりに携わる企業とともに、工場・工房訪問、課題・顧客分析、ブランディング戦略などを通して、学生ならではの視点で伝統と現代のライフスタイルをつなぎ、新たな価値を創出する検討を重ねてきた。

過去5年間の集大成となる本展示会には、日本のものづくりに携わる企業が一堂に会し、職人の技と想いが詰まった作品や商品の販売に加え、その制作過程に用いられる道具や素材を展示した。「『想』伝統を紡いで、想いを贈る」をテーマに、「日本の職人が作品に込める本気の想い」と「人を想って贈り物をする文化」の二つの「想い」を来場者に伝えるとともに、ものづくりの精神と職人の技に触れてもらうことで伝統工芸品を日常生活に取り入れるきっかけを提供。さらに期間中には、製作を

通してもものづくりの楽しさと技術を体験できるワークショップも行われた。

展示会場には、100点以上の品々が集結。テーマにもある「贈り物」をイメージしやすいよう、ラッピングされた商品が会場中央の目立つ位置に展示された。また、陳列時の工夫として、商品横には作品や企業の特徴・魅力に加え、来場者に対し、作品に触れて体験することを促すゼミ生特製のオリジナルポップが添えられた。

ゼミ生らは今回の展示会を、「多くの方に来場いただき、展示会を通して私たちの世代からものづくりの価値を提案できたことは大きな意味があると感じています。また、展示会を機に企業間の新たな交流も生まれており、この展示会が新しいものづくりのきっかけになれば嬉しく思います。今後後輩たちがこのプロジェクトをさらに発展させてくれることを願っています」と振り返った。



手拭いや江戸切子など、100点以上の伝統工芸品が展示された

### 駐日中国大使と 若手外交官が来訪

### 学生との交流会で 活発な意見交換も実施

12月20日、呉江浩駐日本国特命全権大使をはじめとする中華人民共和国駐日本国大使館一行が本学を訪問し、曄道佳明学長、森下哲朗グローバル化推進担当副学長、伊呂原隆学務担当副学長と面会し、その後本学学生と交流した。

学長との面会では、将来の日中関係の土台となる学生交流をますます促進していくことや、国際機関で活躍する人材を協力して育成していくことが重要課題として挙げられ、今後も継続して両者で取り組んでいくことが確認された。

学生交流会では、都留康子総合グローバル学部長の司会進行のもと、中国大使館の若手外交官10人と本学学生が5グループに分かれ、今後の日中関係をさらに発展させるという観点で意見交換を実施。外交レベルだけでなく、市民や民間の草の根レベルの交流を促進し、互いの叢智を結集しながら国際関係の改善を図っていくべきだとの認識を共有した。

学生によるディスカッションの総括に続き、呉大使より本学学生へ感謝の言葉が伝えられ、「相手の国を実際に訪問することは真の国際理解を深めるために大切であり、日本から中国への短期滞在査証免除措置が再開されたことを機に、どんどん中国に来てほしい」と述べた。曄道学長も、「若い世代の交流を通して生まれるアイデアが国際関係を深めるエネルギーになる。本学が多数の協定校を持つ中国へ留学

などでぜひ訪れて欲しい」と語った。

最後に、学生を代表して山下曜さん(総3)から呉大使へ花束が贈呈され、全員で記念撮影を行った。交流会終了後も話が尽きず、引き続き話し込む若手外交官と学生の姿も見られ、相互理解を深める貴重な機会となった。



グループディスカッションの内容について発表する学生

### 「Breeze Lounge」が 2号館4階に完成 環境や多様性に 配慮した憩いの場へ

12月4日、2号館4階のスペースに「Breeze Lounge」が完成した。「それぞれにとって居心地のよい空間」をテーマに、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員が企画し、授業の合間などにリラックスして過ごす学生たちの憩いの場となっている。

これまでは机と椅子が無造作に配置されただけだったこのスペースには、9月のプレオープンを経て芝生をイメージした緑のカーペットが設置されたほか、ベンチやテーブルには間伐材と再生紙を組み合わせた「ペーパーウッド」という木材が用いられるなど、環境にも配慮した設備が導入された。

12月には、誰もが安心して利用できる配慮がなされたトイレが設置さ

れ、ランドオープンを迎えた。新たに設置された3つのトイレは、いずれも個室のなかで用足し・手洗い・身支度ができる「個室完結型」で、座って休めるベンチが設置されたものや、車いすで利用できる広さを確保したものなど、利用者の選択肢の幅を増やした。

本プロジェクトを担当した学生職員の橋野陽和さん(法4)は、「都心のキャンパスの中でも、落ち着いて過ごせる風通しの良い空間となるよう『Breeze Lounge』と名付けました。トイレエリアの設計が特に大変で、トイレメーカーへの視察などを通してどうしたら利用者に安心感をもってもらえるのか幾度も検討を重ねました。今後も学生の声を集めながら、キャンパス内に学生が過ごしやすい空間を創っていきたいです」と話している。



再生原料が使われた床材や備品

### 学生向けアプリ 「My Sophia」を 3月リリース

### 学生生活の利便性向上を図る

本学は在学生の利便性向上を目指し、学生向けポータルアプリ「My Sophia」を3月中旬にリリースする予定だ。このアプリは、大学からの情報を一元化し、学生が必要な情報へ簡単にアクセスできる仕組みを提供する。

Webブラウザ版とアプリ版の2種類が用意され、アプリはApp StoreやGoogle Playからダウンロード可能となる。

「My Sophia」の開発は、「Loyola」の課題を解決するために始まった。Loyolaは長年にわたり機能が肥大化し、「使いにくい」「情報が見つけにくい」といった声が寄せられていた。これらの課題を解決するため、新アプリではLoyolaや各部署のWEBサイトで個別に掲載されていた情報が将来的に一つのアプリで確認できるようになる。

「My Sophia」の名称は、「自分に関する情報が集約されている」というコンセプトから付けられた。開発のワーキンググループには10部署から約20人が参加し、2023年から2年間のプロジェクトとして進められている。今後は、Loyolaや掲示物を通じて学生への周知を図る。

担当の情報システム室中嶋宏治さんは「学生が必要な情報を一つのアプリで確認できるようにすることを目指した」と語る。新アプリの導入により、学生生活の利便性が大幅に向上することが期待される。



さまざまな情報に  
スマホアプリや  
ブラウザからアクセ  
スができる